

星槎大学機関リポジトリ

論文種別	資料
タイトル	大学院における実践と理論の往還：シンポジウムのまとめ
Title	
著者	陣田 泰子・手島 純・菅井 篤・三輪 建二
Author(s)	JINDA Yasuko, TESHIMA Jun, SUGAI Atsushi, and MIWA, Kenji
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol. 3
号	No. 1
ページ	pp. 61-66
発行日	Oct. -28-2021
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000243/

資料

大学院における実践と理論の往還：シンポジウムのまとめ

陣田 泰子^{1,a} 手島 純^{2,b} 菅井 篤^{3,c} 三輪 建二^{1,d}(星槎大学大学院教育学研究科¹・星槎大学共生科学部²・筑波大学³)

1. はじめに

星槎大学大学院（教育実践研究科・教育学研究科）には多くの現職大学院生が、実践上・職業上の課題を解決することをめざして研究を進めている。2020（令和2）年度開設の博士後期課程では「実践と理論の往還」を掲げている。

2021（令和3）年6月27日（日）に、「実践と理論をつなぐ研究」のあり方とは何かをめぐるシンポジウムが、大学院有志の企画により開催された。資料1にあるように、3名の報告者が、職場の課題（実践）と大学院での学修（理論）との往還について、経験談をふまえつつ自分の考えを披露された。約60名の参加者が最後のディスカッションまで参加した。シンポジウムの準備と実施に加え、報告の要約作業は大学院院生と本学客員研究員が担当した。（三輪建二）

2. 大学院における実践と理論の往還（陣田 泰子）

私のヒストリー：生まれは昭和22年。聖マリアンナ医科大学病院で看護師・主任・師長・副部長として26年キャリアを積み、看護短期大学にて教員を3年間経験した。短大では、看護の実践がなくとも知的に研究を重ねる教員と、実践現場での看護師経験一筋で教員となった私は、まさに「静と動」のような世界観の違いを感じた。（26年も経験していた）実践の科学を伝えられず退職を決意した頃、ある雑誌を見ていて衝撃を受けた。目に留まった言葉は、「教育と実践現場の文化衝突」というタイトルの中にあつたクルト・レビンの「実践なき理論は空虚、理論なき実践は盲目」だった。その後、知の探究として大学・大学院への進学を決め、今、星槎大学大学院研究生としてここにいる。

挫折の経験から生まれた看護現場学：挫折を味わった教育現場の経験がその後の私のヒストリーの進むべき道筋となり、看護専門職の証は理論と実践の統合体であるということが明らかになってきた。さらに薄井坦子氏による「実践は認識に導かれる」という言葉から

2021年9月8日受理

a 星槎大学大学院博士後期課程研究生、淑徳大学客員教授、聖マリアンナ医科大学客員教授

b 星槎大学共生科学部教授

c 筑波大学研究員、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程

d 星槎大学大学院教育学研究科博士後期課程教授

実践の質を向上させるためには実践のみならず同時に認識を広げ深める必要があると確信した。その後に出会った「認識の3段階連関理論」(庄司, 1967)は、認識の見える化の方法論として聖マリアンナ医科大学病院において現在も継続中である。暗黙知と言う特徴を持つ看護は、マイケル・ポランニーの言う「暗黙知と形式知」の違いが明確になり、それは氷山で例えると水面に浮かぶ氷のように、誰にも見える部分が形式知であり、水面には見えないが確かに存在する部分が暗黙知である。見えにくい暗黙知の部分が多い看護は、認識の3段階連関理論により見える化が可能となると考えた。良質な看護を提供するために、2つの知、特に暗黙知の見える化のために看護経験の概念化を促進し、言語化していく方法の重要性が見えてきた。

看護現場学の具体的方法：基本は「内省」と「帰納法」を中心とした自己の体験に基づく概念化(内発的発展学習)である。そのため看護現場学では、初めに必ずヒストリー法を用いる。まず「誕生日」そして「今、私は」で所属病院や役職などを記入し、「自分が看護師という仕事を選んだのはいつ頃のことですか」と問いかける。そして「仕事・職種が多数ある中で何故看護師に」と戻り、そこを目指して勉強し入学、国家試験、職場の選択…と過去・現在・未来将来を文脈にしていく。

次に看護経験の概念化シートを使い認識の3段階との連動について説明する。シートは認識の3段階の、のぼりとなるように仕組みられている。①看護現象「忘れられない場面」、②内省「なぜ忘れられないのだろうか」、③表象・構造「こだわる看護、看護の領域は?」、④知の醸成「今後どのように深めていきたいか」、⑤本質「私が大切にしている看護」と認識の三段階をのぼっていく。この間、想起と内省をくり返す。そして、無意識にやっていたことを記述し、のちに仲間と語りあい、更に書くことで、暗黙知から看護を「見える化」する。過去の実践を想起しながら記述し書くこと語ること、その間にはリフレクションがある(無意識であることが多い)。

経験を経てリーダーは看護実践論を持ち認識をのぼり、チームと共に良質な看護の提供へとつなげていく。座学として形作られた知(理論知)と、臨床現場は拡散した知(環境に埋め込まれた知)であり、それらを点や点線でつなげていく。いまだつながっていない知をつなげていくときに、大学や大学院の意味がある。実践を通して学びたいテーマや探究したい知を明らかにしていく。これが専門職としての継続的な能力開発である。これには時間がかかる。きっかけは大学や大学院で得ても、その後は自らが時間をかけて実践と認識(理論)を行き来する作業である。願わくば、必要な時に側に相応しい大学院があり、そこに実践と理論を往還する知のファシリテーターとしての教員が居てほしい。私が星槎大学大学院に期待する意味である。

3. 実践と理論の(1人称的)往還(手島 純)

定時制高校教員と大学院生としての生活：生徒と寄り添うことを自分の教育実践の柱にし

ていた。しかし、器物破損、お酒、たばこ、いじめ、暴力、放火など教師を拒絶する定時制生徒の現実があった。一方、教育の理想の形（アイデア）から「教育はこうあるべきだ」という教師バッシングが続いた。こうした状況下、一念発起し大学院に進学した。

日中はアカデミックな生活、夕方からは荒ぶる生活であった。大変な時には二つの質の違うことをやることで、どちらも薄まる経験をした。大学院では一流の学者とは学校現場を知らなくても現場と地下水脈で繋がる、すなわち研究とはそういうものであると感じた。**現場の省察・研究の省察**：教育現場では帰納的アプローチは大切だが、課題もある。例えば、体罰をして数回うまくいくと、体罰は大事といったロジックになってしまう。「帰納法による仮説は真理を決定付けない」ということもあり、仮説演繹法による検証が必要である。帰納法だけだと決めつけになってしまう可能性があるので、様々なロジックをもっていないといけない。

一方、研究分野の言説に関しては、「経験と勘で物を言わずにエビデンスで」ではなく「経験と勘だけでもの言わずにエビデンスも」を願っている。これは現場へのリスペクトにもつながる。教育は普遍化すると現場の磁場が「削除」されることも多く、全てを普遍化できない。教育実践は実存的である。

現場からの発信を：現場しか見ない実践者は鳥瞰的な視点をなかなかもてない。しかし、虫瞰的視点は持っている。自己の実践の座標軸を鮮明にして対象化し、発信することが大切である。実践者が研究的視点を持つことで、両方の視点（虫瞰的視点&鳥瞰的視点）を持つことができる。実践者は自分が何をやっているかの意味を考察（省察）することが必要である。

4. 実践と理論：現職小学校教諭の大学院生を経験して（菅井 篤）

小学校の先生だからできたこと：大学院修士課程での、私にとっての実践と理論の往還として、ヴィゴツキーの最近接発達領域を紹介したい。私は小学校と児童相談所で合わせて10年間の教育・支援の現場を経験し、現在は東京学芸大学大学院博士課程に在学しながら、筑波大学に研究員として勤務している。

小学校教員時代は現職の社会人大学院生として修士課程を修了した。修士課程では、学校教育における教育実践、ないし教育方法論を主な研究テーマとした。研究では、とりわけ、自らの実践を分析し、記述することで理論化を試み、実践現場に還元していこうと企図した。実践と理論を往還するこの営みを循環的に試行することで、児童の学習効果や学習方略の変化が必然的に示されていった。実践を研究すること、理論を還元することは、教育者である私にはメリットで溢れていた。アクティブ・ラーニングの最新の学習理論を実践化し、効果的な実践方法や望ましい児童の学習方略が示されたことは、学術研究無しでは成し得ない。「なぜ、成績が向上したのか?」、「どのようにして、

学びに動機づいたのか?」、「教室では、なにが価値づけられているのか?」など、多くの問いを現場の教員は抱えている。こうした問いを一つ一つ考察し、「グループ活動で成績が向上したこと」、「豊富な対話が学習の質を向上させること」、「児童らが互いにおこなうリボイシング（オウム返し）で、思考を整理し、意味を生成していること」などを私は研究で明らかにし、自らの実践を洗練していった。

ヴィゴツキーの最近接発達領域とインプロ：このような研究は、ヴィゴツキーの最近接発達領域に基づいている。それは、誰かと一緒におこなえばできることを、その人の能力だと捉え、どんな時も、人を社会的で文化的な存在として捉える見方である。学級や学校が人のつながりの弁証法として成り立つものとして捉えると、教師や児童の営みはインプロ（improvisation＝即興）によって作り出されるものであるといえる。さらにいえば、人生も台本のないインプロである。「予想できない」を前提として、それを遊ぶ（play）ことができるかどうかは、学びにおいてなおざりにできない。遊びと学びを分けてとらえられがちな学校教育を揺さぶる問いを考え、よりよい学習環境を探究できたことが修士課程での学びである。

5. 質疑応答

1) 質疑応答

(1) 学びと遊びは本来一緒だが別に捉えがちとの意味について

菅井：ホルツマンのパフォーマンス心理学でいえば現実をいかに楽しめるか、人生を、予想できないから面白いと捉えることが大事である。その本質部分を現実で十分発揮できるかどうかの違いである。

(2) 言語化して書くことで苦しみを克服する過程について

手島：文章化することは大変だが、自己の内面を客観視できるため、自己の再確認につながる。

(3) 陣田先生の今後について

陣田：現場の看護師が、普段の看護行為からやりがいや意味が見出せる現場教育環境を構築したい。

(4) チームリフレクションを現場で活用する方法について

陣田：チームリフレクションに正解はないが、他者と内省できる先輩がいると短時間でも知の相互作用が起きる。認識の現象化から本質に問いかけ、気づける先輩の存在が大事ではないか。

(5) 気づける先輩を育成する現場教育に関わろうとする理由について

陣田：当たり前は気づかないことが多い。看護に意味づけを行えるような普段からの会話や対話・環境が必要で、自分の行為を振り返れる環境を現場で増やしたい。

2) 感想・コメント

(1) チャットでの感想

- ・クルト・レビンの言葉は、足立淑徳大名誉教授の「理論なく実践は無意味であり実践なき理論は愚かだ」と同じだと思った。
- ・自己に加えて他者と客観的な視点で振り返ることで、実践と理論の意味を実感した。

(2) 教員から

松枝美智子：陣田先生のお話は、以前のお話を聴いた時の思いも甦って感動した。

大野精一：陣田先生と同時代に生き働いてきたことがあっての学問だった。実践の認識論こそが大事である点は深く共感している。

大嶋英一：実務から入ったため指導に迷いがある。今日の話は実践と理論の点で参考になった。

今津孝次郎：理論化において重要な職業上の経験の対象化の話をされ、実践の対象化にもいくつかのレベルがあるなか、レベルの高い経験対象化のお話であった。今回のシンポジウムをこれで終わりにせず、今後の「実践と理論の往還」の発展に向けた、キックオフ・シンポジウムにしていいただきたい。

資料1:本シンポジウムの案内パンフレット

大学院における実践と理論の往還～経験談から

星槎大学大学院(教育実践研究科・教育学研究科)では、毎年数多くの社会人や現職の大学院生が、「共生社会」の実現に資する専門職業人をめざして学んでいます。2020年度に開設された博士後期課程は「実践と理論の往還」を掲げています。

実践と理論をつなぐ研究のあり方について、社会人大大学院生は何を求めているのでしょうか。今回は、他大学大学院で修士課程を修了しました3名の方々に、職場にかかわる課題(実践)と大学院での学修(理論)の往還について、経験談を中心にお話を伺います。

14:00～14:05

- ・シンポジウムの進め方の説明

14:05～15:25

陣田泰子 (淑徳大学客員教授・聖マリアンナ医科大学客員教授、東洋英和女学院大学大学院修士課程修了、現在は星槎大学大学院博士後期課程研究生)

手島純 (星槎大学共生科学部教授、青山学院大学大学院文学研究科教育学専攻了)

菅井篤 (筑波大学研究員・塾経営、横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程修了、現在は東京学芸大学大学院連合学校教育研究科博士課程在籍中)

15:30 から 16:00

- ・本学院生・修了生を中心に質疑応答
- ・報告中はチャット機能で質問可能

司会：三輪建二 (教育学研究科博士後期課程教授)